現代日本文學全集
[34]

歷史・家庭小説集

歷史·家庭小说集

杉浦非水裝幀

改造社版

昭和三年五月二十五日印刷
昭和三年六月一日發行

現代日本文學全集　第三十四篇

著作者代表　中村吉藏

發行者　山本美
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地

印刷者　杉山愛二
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一ノ一二

發兌　改造社
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地
振替東京八四〇二番
電話芝(43)二一二三番

株式會社秀英舍印刷

「歴史・家庭小説集」目次

巻頭寫眞（筆照跡影）

総序……二

由井正雪……塚原澁柿園……三

（年譜）……二六一

元祿女……村上浪六……二六三

（年譜）……三五五

無花果……中村春雨……三五七

（年譜）……四四八

小松嶋……村井弦齋……四五一

（年譜）……六二一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

總序

歴史小説と家庭小説とは、明治文學史中の謂はゆる「最も面白い頁」を構成するものである。前者がその取材の關係上より多く舊幕趣味に傳統を有するに反し、後者は女子教育が進んで、家庭や戀愛が「神聖」視さるるに到り、婦人が文字に眼をあいた結果、創成を促がされた新文學である。

歴史小説の創作に生涯を終始一貫した作家は塚原澁柿園であつた。彼は自らも「兵馬倥偬の間に人となつた」と後年に述懐してゐる位だから、血の中のどこかに武士の魂が脈打つてをり、自然歴史小説に於ては後人の追隨を許さぬ獨特の境地を開拓した。外的に事件を記叙する側の歴史小説は、彼に於て最高頂を劃したとは一般の定評であり、明治に於て一時途絶えんとしたロマンスは彼の隻手に依つて辛うじて支持されたと言ふも、決して過當の褒辭ではない。

澁柿園以外に歴史小説を書きたるものは、龍溪、鳴鶴、南翠、美妙、紅葉、露伴、綠雨、學海、三昧、櫻癡、弦齋、浪六、麗水、水蔭等、必ずしも少くはないが、中に於て最も異色あるは勿論村上浪六である。

浪六の出世作は『三日月次郎吉』で、その、初め『報知叢話』に現はるるや、世は露伴の匿名ではないかと疑うた。蓋し、氣魄の迫る事強き點に兩者一味相通ずるものあつたからであらう。その後彼が矢繼早に出したいはゆる潑剌物は、一時讀書界の寵を獨占して、硯友社をさへも後へに瞠若たらしめた位である。本書に收めた『元祿女』は中期の作で、或は世評の高きことに於て『三日月』に及ばぬであらうが、筆が老熟して初期の生硬と稚氣とを脱し、今日から讀んでは遙かに此の方が面白いのである。それに浪六の中から、珍らしくも女性を主人公にした作を選んだのは、澁柿園の作から男が中心題材となつてゐる『由井正雪』を抽いたから、それと照應あらしめようとの、若干の心遣ひからも出たのである。なほ浪六には『當世五人男』『八軒長屋』など、別の一面のある事を見落してはならない。

家庭小説の呼び聲の特に評壇に高かつたのは、明治三十年代の前半期で、蘆花、北星、幽芳、掬汀などが既成文壇に於ける主な作家であつた。併しその頃は新聞紙が常に懸賞小説を募集して、新作家を紹介し、そしてそれが文壇への有力な登龍門を形式した。

その懸賞小説の中で最も有名なばかりか、よく明治文學史に不朽の名を留めてゐるのは中村春雨の『無花果』である。基督教をわが文學に初めて有效に用ゐ生かした清新さは、今日と雖も大して錆びてはゐない。頁の都合上本卷には收め切れなかつたが、讀者もし大倉桃郎の『琵琶歌』を讀まるるならば、當時の懸賞小説の雙璧を併せて鑑賞することになるであらう。これは部落民の悲劇に著眼したもので、家庭小説のマンネリズムをなした常凡の戀愛談とは自ら選を異にする。

併し、もし、たとへば澁柿園が歴史小説に於けるが如く、その長き生涯を、家庭小説に殉じ切つた人をと求めるならば、村井弦齋をおいては、他に斷じて無い。彼の名を高からしめたものは『小猫』『日出島』『櫻の御所』『食道樂』など、十指を屈するもなほ餘るが、この『小松嶋』は彼が晩年、漸く小説壇に筆を絶たうとする直前の作たる點に異色があり、殊に今迄單行の書册となつて現はれた事が無いので、この集に特に收めることにしたのである。

由井正雪

塚原澁柿園

由井正雪

（一）

「大事ぢやは〳〵。彼騒擾は强訴おざるは。」

「見た人數は百四五十人、一手は今御山御門番が陣屋に寄せて、一手は此處へ推參するげに見え申す。」

七月の炎天、燃るが如き燒砂を蹴立て丶物聞の足輕兩人、息も繼ぎあへぬ注進の間もなく沖に靡く土用波の餘響に合せて叭々といふ吶喊、間々に聞ゆる竹螺の音。素破といふ間に、蓑笠に身を固めたる血氣の百姓七八十人は「御願ひ、お願ひ。」「御助け、お助け。」の諸聲の裏に押し來りぬ。

押し來れるは駿州有渡郡大谷村の東端なる、大庄屋なにがしが家、今の足輕が主なる武士の旅館前なり。

奥の方には主なる壯き武士、

「ナニ强訴……寄すると言ふか！」

再回とは問はず、床に飾れる具足櫃より紺絲の小腹卷取て投げ懸け、縮羅の帷子を其上に套りて、長押に倚せたる九尺柄の槍を小脇にした る、其人の年紀は廿五か六七なるべし、面の色飽まで白く、鬚青く、脣紅ゐにして、天晴稀代の美男なるが、爾るにも似ず、脊材は偉く、腕の肉硬くして、帶びたる兩刀も寸延の長刃、槍柄も日向樫の把握を太く、鐵具しげく製作せたり、加之も其の意地强く、耐へぬ氣象は、緊束りたる口元、勇氣を持てる眼裏、痼癖を見せたる眉宇のかゝりにても知られぬ。

此の面貌と、身の道具、人馬の强健さとにて推すれば、此人大家の小姓立にて、殿の御寵と、其身の器量とに登庸られて、物の頭、奉行ともなりたる仁か？

觀る目は違はず、昨日建てたる此門の新らしき標札を見れば、此人は是れ、紀伊殿御内の牧野兵庫！　もとは金彌とて、大納言殿（頼宣卿）御祕藏の小姓なりしを、目今は安藤三浦並になされて老職の一人に召加へられ、權勢飛禽を墜すばかりの出頭人なり。

馬牽ッ！　といふ言の下に、栗毛の駿足は牽立てられぬ、兵庫忙しく其の鞍壺に跨がる時、

「御願ひでおざる。お願ひでおざる。御救助のお願ひ……憐憫のお願ひ……。」鄙の叫號ははや門前に逼り來りて、鎖したる門扉を撲敲く聲、板屋の霹と凄じきに、家内の男女は疾に逃失せて一個もあらず、殘れるは兵庫主從廿餘人、其餘は御宮（久能山東照宮）御修覆の御用として召伴れたる大工番匠石斲の工、なれど此等は事變の初發より頭を埋め臀を窄めて、只怪我せじと念ずるのみ。「うゝ大門開い！　奴原、推參！」勇める主に飼立てらるゝ家來とて、臆れたるは無かりけり、馬脇の士兩三人ばら〳〵と走り蒐つて大門颯と押開けば、得たりやと大勢、むらむらと入らむとして、但み見れば、馬上の兵庫、丹花の脣を一文字にして、黑漆の如き眉を蜂谷の上まで掀昂げたり、手にせる槍は我を芋刺にせむずる擬勢、左右に附隨ふ家來們も、新宮育ち那智生れの死生知らずといふ面魂、闕の中へ其の泥脛一寸とも踏込まば！　と疾視へ詰めたる……。

此の鼻嵐に噴かれて門外なる脚底は漂盪きぬ、「こりやならぬ、迂濶と入るな、後勢を待たうぞ後勢を待たうぞ。」小頭らしき者は走り廻りて制すれば、彼等が中に叫喚く聲連りに發りて、「三四郎べえ呼べ。安居の背兄さ呼べ。」こ

こに此の嗷訴の來由を尋ぬれば、去年、寛永十九年、關東筋大旱魃して、伊勢以東、相模以西は田畑の立毛皆枯れたり、かくて七月の中旬より打翻したる陰霖の降り續けるもの、月を踰ゆれども歇まず、海道の川々悉皆く出水して纔に遺存れる作毛を押し流す、これによりて今年東國大饑饉とは聞えしに、其の翌年（廿年）は又春の季より瘟疫これらの國々に流行れて、人の病み臥すもの其數を知らずといふ。江戸柳營にても此の注進に驚かれて、救恤の使者を派遣し、所在の倉廩を開きて、飢を賑はし、醫藥の施行、さま〳〵の手を盡さるれども、去年を承けたる今年なり、其事意の如くに行はれで、人心自然靜穩ならず。かくてはとの又僉議ありて、普く御領の國々に令し、反別壹升の過米を出させて彼の救恤に費えたる粮米の不足を被充しめらる、饑に疫に憊れたる人民、ひたすら其の難義を訴へたれども、有司は何の警戒むる處かありけむ、斥けて用ひず。然るに當國は、駿河の名におへる富士安倍藁科の川々の洪水に去年は暴され、今年はまた八丈島より潮風に乘りて來るといふ疫鬼に祟られて、住民の難澁他所には超えたるに、年貢御免とこそあられね、結句は過米を徵發るゝことたとひ首を召さるゝとも能はじ、といふ數回の愁訴、其が聽れぬ果の、竟に此の嗷訴とはなれるなりき。

（二）

彼等の門内へは討ても入らず、此方も出でゝ蹴散さぬに、國一つを敵味方の境界にして瞰まへ合うたり。と看る〳〵、平松の方よりして同じ蓑笠を身に着けたる、彼等が同類の一人と見ゆるもの、喘ぎ〳〵走せ來れるが、其奴は聲を高くして、「無禮せな、其の御衆べえ手指しては濟まぬぞ。退け〳〵。」

彼等が中に叫聲は發れり、「や、背兄が來た。三四郎が來た。」「己に任せろ、お主等は退けお主等は退け。」言ひも敢へざるに彼は竹笠をかなぐり棄てたり。

看れば其齢三十左右なる、鼻隆く、眼鋭く、一癖ありて見ゆる壯者。蓑の垂を背後へ刎ね除け、一通の折掛狀、表面には御訴へと筆太に認したるを青竹の尖に挾みて高く掲げ、さりともと危惧みて、待てる〳〵と支撐へむと袂を握る許多の手を右左りへ拂ひ斥けつゝ、「やア殿方、聊爾ばし申さぬ。紀伊國樣御家老樣と見申この御願ひ。三十四ケ村數百人の男女に代りましての御願ひ。安居村の三四郎、兵庫樣、御前へ出でゝ申上げまする仔細がおざる。」大音聲の大息切たる、其面には必死を見せたり。

驚破曲者！　遣るな、止めよと牧野が馬脇はむら〳〵と寄る。我が大將の取擒られぬと見て門邊に渦卷たる一揆等は、これを掩護むとどやどやと入る。襲〳〵と混々とは一轉瞬間に衝突して、一場の亂戰、血雨の今や降らむと見る處に、「えゝ來なく。こゝは已一個！　一個に任せろ。三四郎一人死ねば澤山ぢや！」かの青竹を遮攔にして押し戻す。這の現態を見たる兵庫、「やア汝ら待て。素奴まづ拘け！」

押戻されたる百姓、制止られたる馬脇、心ならずも煞と分れて、寸後の容子什麼と、又かの門闕を境にして疾視み合ひたり。兵庫は聲高く、「其處な三四郎とやらむいふ奴申すといふ仔細は何事ぢや。」

馬の鼻に額づきたる彼の壯者は、先づ感激の聲を搾りつ、「あ、殿樣、忝じけなうござります。御尋問、有難う存じまする。仔細、私不調法の口から申上げうより愚筆で認めましたる訴狀がござります。何卒これ御覽下されて……」

「むゝ、これへ越せ。」

訴狀は兵庫が手に入りぬ。彼は槍を其馬の平頸に引つけたる儘、表包を捨て、弓手に押開き、彼面を一目、此文を一目、鋭き眼に覽較

べつゝ、躾こする〳〵と讀み了れり。

讀了りて兵庫、猶其狀を口裏に諳するやうなりしが、「三四郎、汝は不屈なる奴な。身の離澁の是非なしとは言へ農民の分際として天下の御政事を批判する…剩さへ御禁制の强訴を企つる…汝、御法の重いことを知りならぬか。」聲色の猶激しきを見るより、馬脇は又も素破と眼を注ぎて手藥煉ひけば、門外は再び吶と喧噪き立てり。三四郎、此彼を一睨して、「存じ居ります。存じをればこそ一命は無いと覺悟してをりまする。」「ふむ、一命は無い？　覺悟した？　汝、それ程の覺悟で何故徒黨を組む？」「いや、三四郎徒黨は組みませぬ。訴狀にも見えたる通り、此の强訴は私一人の發意にござります。三十四ケ村の男女に代りて三四郎一人の致す所爲にござりまする。」馬上の人は耐へずして大喝せり。「やツ甘にすれば乘勢る奴！　紀伊國武士を盲目にするか！　先刻よりの門外の奴、彼等、何者ぢや！」礑と睨られても彼は臆せず、居丈高の毛胸を披きて丁と撲ち、「殿！　彼等は彼等、我等は我等、徒黨も組みませねば申合せもせぬ、紀伊國樣御家老、御目明と存ずればこそ斯くは申します。」「えツ又しても兒童を騙す…」「いや虛妄ではない。御領は違へ、駿河の者別しては久能の御山御附の民、大納言樣御一家の御恩忘却のもの尙だ一人もございませぬ。これに依て此の御願も、紀伊國御家老たる御身樣の御着を待て申出まいた義にござりまする。」

（三）

紀州の家老、目明といふ謎語も、徒黨を組まずとの辯解も、此男、あの大勢の老若にかはりて身一つを拋げ出したる覺悟の口なるは既に解せたり、其の健氣さも殊勝なるが、さるにても我主なる亞相殿（賴宣卿）駿河遠江の御所知を替られて今の紀州に移らせ玉へるは、はや廿五年の往昔と聞く（賴宣卿、慶長七年の誕生にて、當時襁褓の料にとて駿州久能を賜ふ。翌八年常陸州水戸に封ぜらる、廿萬石、同き十四年水戸より駿府に移り駿河、遠江二國を領せらる、五十萬石。元和五年駿府より紀州和歌山に轉らる、紀伊幷に伊勢にて五十五萬五千石。此の移封元和五年より今年寛永廿年まで廿五年）其の長久き間、彼等が餘澤を忘れずして仰慕し奉つること如是きは、そも什麼なる善政や施し玉へる、民を視ること傷めるが如き御慈悲は現今とても親しう見まゐらするも、是は又た今更なる奇談かなと、「やをれ三四郎、不思議を聞くぞ。汝、大納言樣御一家御芳恩を忘れぬから、猶其の御手にすがりて一同の難義を救はうとか？」問ひ懸くる兵庫の眼裏は、やゝ緩和びぬ。三四郎は話は無くて、首を低れたり。

「むゝ、お事、紀伊國殿御恩といふを、それ程、眞實、忝けなく、日今も念ふか？」「存じまする。親子一家再生の命の親樣！　寢た間とて忘失ませぬ。」

兵庫甚麼とか思考けむ、持たる槍を毫乎と棄て、彼の訴狀手にしたる儘にして、馬上より纔然と下り立てば、家來は急ぎ床几を直しぬ。「三四郎近う寄れ。我殿を命の親といふ、其の仔細？　次第によつては兵庫、其方らが後楯となつても取らせうぞ。」夢みし如き面色にて、三四郎は彼の面を瞻仰しが、「いや、心急ぎの場、御禮は後から…。先づ其の仔細。」彼は些しく身刷しつ、語り出づる其次第は、元和三年の秋の事なり。此年伊豆駿河二ケ國は昨年（寛永十九年）に等しき大饑饉して、豆、芋の葉は言ふに及ばず、山には葛草蘚、海には貝藻の類も搜索盡くしつ、人々は枕を並べて餓死を待つのみの事となりしに、一日村の行人來りて、家內の者皆出でよといふ。三四郎の父母なるもの驚きて蹣跚ひ出づれば、一挺の女駕に召されたる上藹、其の駕脇の士して一人宛二升の米

麥を與へられ、恁くして村内殘りなく賑救されて御通りなる。彼方は、み、も誰か、神か佛か、と俯拜む傍に村長來りて、お主ら知らざるか、あの御方こそ勿體なくも御領主樣御母親樣養珠院の御方、この程より中將樣（賴宣卿）この時參議從三位左近衛中將たり）に御强來ありて、御化粧料二千石を五ケ年が間御廩より御借りなされ、難澁の我々をこの樣に御救恤下さる、今の御米、一粒だも粗末にせば、それこそは御罰が中るぞ！「……箇樣に觸れて去なれました。其時には親父も母も聲を發げて——子供の私さへ、一所に涕泣まいた。」と語ふ臉には、古を想ふか、今を悲むか、ぽろ〳〵との涙を見たり。兵庫も覺えず感歎の首を傾くれば、馬脇廿餘人も耳を澄して、門外なる大勢も闃然となりぬ。三四郎は猶土に手をつきたる儘、「其後間もなく御小屋が懸りて、御粥の御施行となりまする。翌年は御年貢御免。其の翌年は檢見衆が見廻られて半個の上納といふ、其の七月……」門外なる大勢は、此時突如箒を揃へて、「……御知行替になりましたはよ！」三四郎又引取りて、「御跡に渡せられましたは……あの大納言樣。」大納言樣とは、今の將軍家（家光公）御弟駿河殿とて世人の讃れし忠長卿なり、此殿は我も知る、寛永九年に大逆の罪をもて御身上滅却に及びたる程の御方、聚斂、酷虐、其の徵發の苛重かりしも知れたる事なり、菩薩の後に鬼を得たる彼等が苦惱、そも甚麽ばかりぞ、と兵庫愁然たる眉を皺めて、「何とありしぞ、其の御成敗？」「申す迄もおざりませぬ。なれど其の御時代より猶苛酷いは、今の酒井殿……」「えッ御城代の御支配、非理いとか？」兵庫が未だ言ひ斷らざるに、彼處なる百姓原何物にか驚きたる、群鴉の噪ぐが如くに門内指して動搖き入れり。

（四）

三四郎は呵呀と愕く、兵庫、何事ぞと床几を放ちて門外に走り出でつゝ、但見れば、是れ先刻の注進が、御門番の陣所へ寄せしと云ふ彼等が仲間の人數なるべし、看る〳〵五七十人の百姓原は蓑笠も四度路に、久能の山の岨沿を此方に對ひてさん〴〵に逃げ走る。其後より源氏車の小旗を振りたる一隊の兵、勝鬨いかめしく、突棒刺叉槍長柄の獲物々々を手々に執りて、兎狩か等のやうに叩き立て捲り立て、一頭も逃さじとの勢もて逐ひ逼る。其の追擊を馬手に看做せし今一隊の人數百人餘は、切火繩の小筒十四五挺を眞先にして、海際の眞砂路を眞一文字の此の大谷村をさして寄する狀なり。「やア、彼は誰が手ぞ？」後に續きて馳せ出でたる三四郎、山手のは御門番の榊原殿が手、海邊のは今申した酒井殿衆。「むゝ事は急ぢや。さりとてお事ら……縛らすも可愛い。逃い、逃げい。」三四郎は連忙しく、「滅層な！」「滅層でない。お事ら紀伊國を賴むといふ、紀伊國の牧野兵庫賴まれた。疾う落ちい！」慨然たる兵庫が面を瞻上げ、視下し、「あ、忝けない、御芳志は生々世々！然りながら落ちたとて迚も逸れませぬ、逸れぬを逸れうとすりや殿樣御難義は眼前。其れよりも最初の覺悟通り私が身一個大勢の命に替ります、それ本望ぢや。訴狀は御手、思ひは置かぬ。駿河男兒の意地も覽て下されい。」

什麽其の決心の男らしきよ。其の男らしき決心の什麽彼們主從が胸を擊ちたるよ。彼們は只張裂るばかりに其日を見合せ、洟を啜りて、其臉にはら〳〵と翻せる涙滴を拂ひも敢へざるに、音の響は忽諸耳朶近く來れり。「這、奴原、紀伊國殿御家老旅館へ入り替ッたぞ……擊て取れ！」頭人らしき士の下知に伴れて、先手の鐵砲ははたはたと火蓋を切りぬ。無法に驚く主人より、耐らぬ兵庫が馬脇は吶と叫纏ぬ。「やア粗忽！紀伊國の士こゝにをりやるぞ。旁聊爾！」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

鈍栗照、附鬚、大奴頭の角鍔、何さま一揆とは見えざるが躍り出でたるに、寄手は倒ッて呆れたり。「こりや如何ぢや、強訴人と紀伊國衆と一緒になッたは！」叫罵く雑人原が背を搔き分て、現はれ出でたるは頭人なり。「是れは御城代酒井山城守が老黨、根方彌五兵衛。昨日の御案内にて承知いたいた、紀伊殿御家老牧野兵庫どの此家におざるか？」

彼の口誼は禮ありて聞ゆれども、既に是れ個光景なるに些とも油斷せず、其身の周圍には、此方のにも劣らざる倔强の大奴七八人を五の目に立てゝ、乘馬をさへ引つけつ、猶且つ種子島の小銃三挺をも切火縄して持たせたり。兵庫、此體をぎろりと睨、「牧野兵庫は小生ぢや。根方氏彌五兵衛どの御身は何用あッて渡せられた？」「何用と仰せらるゝとは？」「兵庫が旅宿へ其の異體して。」彌五兵衛は、意得たりと逆はず、「支配地の民、測らざるに强訴を企て、御旅館へ推參と承はッて、御見舞として取敢へずの參上。見申せば大勢の奴原……段々の御無禮は改めて御謝罪の申上ぐる。御座なさるる場所の近間で此上の騒動、御氣色も如何と存ずれど兎角は此儘には棄置かれぬ者、一々に縄縛ち申す。御免なされい。」兵庫それをば後眼にかけて、「いや、御無用ぢや。

扨こそ當時の强者として、江戸にても御心を隔かるゝ紀伊國殿、其の御威勢を肩に被て家老の兵庫すら横に車を推し歩くか、と彌五兵衛は驚きたり。

（五）

紀伊殿、いかに當將軍家の御叔父にましませばとて、其の家老の牧野兵庫、いかに其の御威勢を嵩に被ればとて、現在の犯人を眼前におきて、御城代の老黨たる士、此の横車を其儘には通させ難し、と彌五兵衛少時思案して、「無用とは仰らるれども、御大法の前……其の意趣の分曉ませいでは、拙者いかにも……」「迷惑とか？　これは當方への駈込者ぢやよ。」「えい、駈込者？　這奴原を？」と彌五兵衛は其眼を瞪れば、物の結果を如是と見し彼が伴侶は、いづれも其手に忍の鮮口を寛ろげたり。

主も此勢にや發揮られたる、俄に其肩厲を丁と張りて、「それで御分は、御貫しやるとか？」「應、駈込者で饜まで貫す。」「駈込者でも苦しうない、這奴らは皆罪犯の者。御渡しやれい。」逼るを尻冷笑ひて、空嘯きぬ。「紀州には駈込者を出すといふ法は無い。」「それは紀州の法……。公儀御法は？」「それは其方勝手の隨意ぢや。」「呀？　勝手の隨意？　然らば彌……？」兵庫、這回は回答もせず、首掉を掉れり。「……手籠にしても？」「やア手籠？　大納言殿家老牧野兵庫を手籠にせうな？！」

突然たる大喝、風雨の如きに、彌五兵衛は膽を奪れて覺えず二三間を丁歩けば、供も組子も一つに肩潰れて十間餘りを吶と退く。這、口ほどにも無い奴、それで自己等が手籠になるか、と兵庫が馬脇は追うて出づ。なれど彼等は大勢なり、後勢を頼みにして逃げたる足を踏み直し、鐵砲直々と前に進めて、一歩近らば牧野も一揆も只一撃と勢ひ籠む。

それにも怯れで紀州方は躊々と倚る。此距離は五間に近し。時に半空の炎日は火鏡の如くに面上を射て、額に流るゝ膏汗の睨まへ合ふ眼に浸入るを、彼も我も拭ふ暇すらなき阿呀の咄嗟。

但見る、兵庫が手の背面よりして躍り出でたる赤裸の大漢あり、彼は雙方が間に割て入り、大手を廣げつ、仁王立に突立ちたりき。「各位御無用。紀州殿御手に駈込だは、斯くいふ安居村の三四郎、强訴の本人。幸ひの御城代御手、改めて御訴訟申す。何卒三四郎召伴れられて御鞠問下されい。」これに驚きて城代が隊も、

其銃口を稍空に向くる時。「やア汝三四郎……汝待て！」又もやの叫喚は起りて、續きて馬を躍り出せる、是れ牧野兵庫なり。其れと見るより三四郎は轡面に寄と綁りて、「あッ殿、こゝは……此處は何卒三四めに。三四郎決して殿の御面皮……」「えゝい汝、斯くまでに面を虧せて！　此上に虧く面皮があるか！　汝憎くい！兵庫が刀鈍しをッたな！」執り直したる槍柄も折れよと許りに、彼は憎き此漢子を散々に打擲する、苛杖の下に三四郎は聲を搾りて、「あ、殿、情ない。三四郎心底分曉ませぬか。義理知らずと仰ある、これが殿への義理、面皮を虧すとの御腹立は、大納言様へ眞正の忠義を立たせて進ぜたい心底ぢや！」「えッ尚だ喋く？　殿への忠義、それを汝に……」とは罵ひたるも、詮も無き大死はげに不忠なり、自己が躬を城代の手に委せて此場の危急を救はむとする、其心を斟めば我への芳志か、我を賴憑むといふ心の軈て此の動作とはなりたるか。と念へば自然撓つ手も弱るを、彌五兵衞は敏くも見て、ソレといふ下知。意得たる彼が組子はばら〳〵と倚りて、兵庫を隔離て、三四郎を中に包圍み、大濤の退くらむ如くに颯と引く。今まで其處に蠢動きたる百姓原は、既に鐵砲に恐れ、兵庫に惱れ、今又た首領の三四郎を失へるに怖れを爲して、疾く落失て行方を知らず。

（六）

此日强訴人として城内に捕はれたる者、三四郎を初として、其他に十三人、これに三十四ケ村の庄屋名主以下を加へて、都合百六十餘人とは聞えき。其頂本は本人も自ら曰ふ安居村の三四郎なること何れの白狀も紛れはなし、これに依て彼をば重き牢舍を申附け、猶其れが妻孥眷屬一人も殘さず搦め來れとの下知を傳へて、城代は組子を發せしが、彼等は多時して手を空くして歸り來りぬ。其告ふ所を聞けば、曰く、彼は獨身にして、兩親は夙く死しセり、殘れるは只一人の妹なるが、此女は曩に家出して在處を知らずと。與力同心ら便ち上司の命令を乞ひて、其女が人相に就き、普く支配地に索めしめたり。

夕づく日の落つる頃には、鄕に逃げ散たる市中の男女も鴉と共に塒に戻りぬ、其中には、盜賊の難に遇へるもあるべく、妻子の行方の猶知れざるに、血眼して噪ぐもあるべく、委しく問はば千樣萬態なるべきも、只此の城下の戰場とならざりしと、火災の無かりしとを歡喜て、此夜は街衢の口々に遠篝火を燒きて見張をす。況て城内をや、三之丸の囚獄には如法き大勢の囚虜あり、門々の守衞また嚴重ならざるべからず、加之ならず或る向よりは、今宵夜討の懸念あり、用意よく仕つりて其場に不覺すな、との沙汰ありたれば、素破といふ物の鼓躁き、人は上帶を些とも弛緩むる暇なくして狹間を走れば、馬は腹帶を緊束られたる儘にして飼につく、此の最中に、本丸なる廣書院にては、御城代酒井山城守を首座にして、大番頭、御目付、町奉行（何れも駿府在勤のもの）久能御門番たる神原越中守をも其席に加へて、大事の評議は開かれたりき。原來この强訴といふもの、當時の法としては謀叛反逆に準ずるの大罪、極刑をもて之に當らるゝ定規なれども、さればとて彼の三四郎らが振舞、多寡が窮民の一時を狂へる小事なり、生殺の權柄、既に江戸より當御城代其人の手に委任されたる以上とあれば、一應の糺問を了りて刑名の宣告、何の躊躇かあるべきやう無きに、斯く大勢の職司をつどへて祕密の評議を凝らすといふ、當面る軍議か？　されど見えたる敵も無し、抑何事ぞ、と仔細を尋ぬれば、思ひきや、彼の紀伊殿家老牧野兵庫が身上なりける。

兵庫が當日の擧動、其の奇怪なるは既に衆目の視る處、今更の詮議にも及ばず。而して彼が

其の如是く振舞へるは抑如何。竊に聞く、紀伊殿豫て思し召し立たるゝ趣旨ありて、柳營にても内々の御用心ありとかいふ。然らば、或は其の腹心の家老彼の兵庫に密旨を仰せ含められ、御宮御修覆の御用とあるを幸ひ、御舊領たる當國に來りて、人心を煽起ち、彼等がかの過米につき度々の愁訴の聽れずといふを機會として、かゝる珍事を挑發させたるなる歟。さらば彼の三四郎といふ奴、彼は指頭に繅弄ばるゝ木偶にして、其本人は躲れて遠く黒幕の裏に在り。此の黒幕を引めくりて其の妖魅の正體を顯露すべき歟。

扨て斯くあるものと看做て、鞫問のやうを如何にすべき。一通りの强訴と見れば、彼等はは拷問の要も無きが、他に然る仔細ありとすれば、嬰まで鞫訊して、其れが口頭より實を得る歟。之を得むは難からず、なれど其實を得て後の結果、これぞ今人々が苦心の處、談合の要も全く是れなり。藪を打つて蛇を見むはもとよりの覺悟なり。されど又それが爲に、柳營の御運を短縮め、天下の爭亂を速促るとありてはこゝ思案の要るところぞかし、既に先年の島原一揆、あれ程の奴原があれ程の人數を集めて、あれ程の小城一つに籠りてさへ、あれ程の騷動なりし、況てこれは御内高七十萬石に餘れる大名、加之も其の大將は例の御仁、それが御旗とあらむ程には海内の擾亂は如何なるべき、或は倖ひに然なからむも、此事公然となるに於ては、我々の此の微力者が御三家の一家を對手としての訴訟なり、方々も知るあの殿があの御機轉にては、烏もいつか鷺となるべく、宿老達も時の勢を察られては、利分と見ながら非理に落す權宜の裁斷も無しとは言ひ難たし、戰場の討死、殉死の追腹、それらは我等分として辭せざるも、讒間の曲者と叫ばれての犬死は口惜しや、これはいづれも再應の分別なうては叶はぬところ歟。

席上の評議は斯く區々なれども、紀州といふ二字に壓されて議論の腰兎角に引立たず。其中に城代の城州のみは、一癖の强者、人を人とも思ぬ我慢の性質とて、紀伊國とて兵庫とて何條事あらむ、罪あらば引捕へて腹切らせうまで！親疎上下の懸隔を立て、對手の强きに臭き糞に蓋する如きの政道して、かくて天下の御法が立つか！況てあの百姓めら、然る不思議の心底もて嗷訴を企つる、肉も骨も摧ぐるまでに責め苛窘みて其泥を吐かせでやは、と叱られしが、衆議はひたすら穩便の方に傾きて、渾ては江戸表伺の上との事に一決し、此夜御目付の一人は時限りの早迫もて驗府を發足ぬ。

（七）

酒井山城守重隆は、備後國福山三萬石を領して、小名なれども幕府に於いては譜代衆の歴々たり（此人、雅樂頭忠世が庶子といふ然れども未詳ず）今年三十五、血氣なほ剛きに、生得の癇癖は、頭の壓人なき驗府御城代といふ權勢によりて益募りて、輒ともすれば肱近の二尺六寸、祕藏の關の孫六に手の懸ることも屢々なりき。如法き荒者なれば、物の仁慈、寛恕などいふことは毫末も知らず、武士は命を惜まぬもの、農民は貢租に努むるもの、武士にして身を庇護ふは沒陰囊の腰拔にして、農民にして貢租に懈たるは鄕黨を害ふ亂民なりとは、彼が座右の銘として、人にも常に告ふところなり、其の座右の銘に反るゝ亂民は今や目前に現はれ來りて、沒陰囊の評議は昨夜の議席に勝利を制しぬ。彼は熱腸の寸斷るゝまでに憤悶せり。「やア彌五兵衞、今日はあの强訴めら予が面前にて鞫問せうぞ。急げ、用意！」其見脈に恐怖をなせる根方彌五兵衞、急ぎ糺問の白洲を開きて、三四郎を初め、連坐の者一同を拘入るれば、掛りの與力（城代附）同心は既に其の場所にあり。與力は

机により、罎摺り流しつ、それが可怖しき凶眼もてじろ〳〵と睥れば、同心は十手を把りて、喝とも言はず其乙骨撲挫ぎ與れむとの擬勢もて突這ひたり、白洲の四方十間が間は、城代の足輕にてさし固めたる、手にせる桿棒は羅刹の鐵杖にも似て、睜れる眼は惡虎の如し、傍邊には、搏木、抱石、浮利々々なんど、見るも恐ろしき拷掠具を山と積めるが、爾其器には、いづこの誰が叫喚の記念なるらむ、鮮血の痕黝く印りて、腥臭き氣は八萬の手孔をして覺えず竦立たしめぬ。身は無きものと覺悟せる三四郎さへ戰慄せり、況て其餘をや、二日とは仰ぎ視ず、首を垂れて死人のごとし。「御城代、御出座さふ。」引聲は長く白洲に響き渡る時、三四郎が左右に控へし獄卒らは、其が袖を牽き、頸を壓して、彼們が額を砂利の上に着けさせぬ。三四郎は其の仰向せる頭の上にさや〳〵との衣服の颯響の停住ると思ふ間もなく。「目安書、讀み上げい！」我が鼓膜を劈く如き、尋常とは異りたる甲走れる哄聲、これや其の御城代かと、彼は微しく其頭を擡げむとする突端。「汝ッ！」壓搾板の如き掌は下りて、彼が額を突如に砂利に叩きつけぬ。砂利とはいへど其大さは拳頭より大なり。血肉を包める表皮の此の堅石に撲當られて何かは耐るべき、哀れむべし其額は忽ち破れて、鮮血は傍近を眞紅と染め做せるが、彼は此時いたく膈をや壺盪せられし、此の滂沱たる流血の裡に俯伏して、人事を省らざるが如くなりき。

「むゝ、好い態ぢや。其面を擡げさせい。」城州が下知に、獄卒らは、再び其頸を攫みて凶暴く扯起しぬ。なれど三四郎は猶夢幻の心地なるが、混々と流るゝ血を滿面に浴びたる儘、覺るともなき眼を半分瞪開れり。「ふゝ、好え面ぢや。こりや三四郎、予の面が見ゆるか？……ハゝ生根が無い？　こりや　水與れい。」同心の一人はあッと應へて、傍近なる番手桶の水、柄杓ながらに持來り、彼が咬緊めたる齒を扳明けて注ぎ入るれば、獄卒は其の脊椎を碎けよと許りに撲てり。無慘なる犧牲は蘇息りぬ。彼は纔かに眼を定着て瞻仰れば、白洲の緣の端近う乘懸れるやうに坐せる一人、これぞ城代酒井殿其人なるべし、剃立の月代青黛を抹りたる如きに、面の赭紅きこと熟せる棗實かとも疑はれぬ、猪毛生ひたる腕は行短かなる帷子の袖よりぬッと露はれて、甲を出でたる龜の手の如く、腰に帶びたる朱鞘の脇差は普通の刃より寸延て、殼を脱けたる赤綿蛇にも彷彿たり、一文字を畫く毛蟲眉、一徹の氣象を面に呈せば、矩形に曲れるの字脣、其の短慮なるを我から見せたり、是を陣を破り敵を屠るの將とする、蓋ふに打應しきものあらむ、貧を恤み窮を賑はす牧民の職に在らしむること、我未だ其の可なるを知らず、と彼は思へり。太息をつく〳〵、三四郎は綱縛められたる肩を窄むるを、城州は血を迸したる眼に瞋はたねめたり。「やア汝其處なる奴、汝此の强訴の張本と自ら名のるが、見た處不審があるぞ。此の一件、原來の發意は何所の誰で、何人と其の手筈申合せた？」三四郎は初めて口を開きぬ、「御不審は何と仰せられます？」「分曉ぬか！此の强訴を企てたは、誰人の指揮か白せと問ふぢやは！」城州が聲の荒きに伴れて、三四郎が眉は愈顰めり。「御答にも困じますこと、誰人の指揮ぢやなどゝ？……」「吐さぬかッ！　ソレ撻てッ！」吟味も法もあらばこそ、彼は白洲の罪人と謂はむよりも、此殿が泄憤の的となれるが如し。餘りの無法に、彼は棄てたる身ながらも其寃を叫ばむとする折しもあれ、表の方より馳來れる根方彌五兵衛、彼は遽たゞしく城州が耳を扯て、「殿、來まいたぞ〳〵。あの兵庫めが！」

（八）

紀伊國殿家老牧野兵庫！　それが今突然に

曩蒐け來れる、言ふまでも無き其目的は、目前なる三四郎等が身上なるべしとは注進の彌五兵衞のみならで、此座に在りと在る者が目と目を見合ふる面にも知られぬ。我慢の方には天晴れ他に一個と對手なき城州さへ、其の根強きには驚きしが、稍呆然たる色、其色を察て知る彌五兵衞は聲を潛めて、「火急の御逢と申まする。何と返答……？」御用の都合、目下は御對面叶ひがたし、重ねて、とも追儺はむかと暗に諷するが如くなるを、傾慮むけたる城州、「むゝ……いや會はう。」「御別席にて……？」「いや、こ此席へと言へ。」

胸裏の成算ありや否や、斯く言ひ出しては金輪引かぬ主の氣は知りぬ。其は兎も角も、こゝにての對面、或は事の不利なるべきかと虞れたるも、時の趨勢は非なきに、彌五兵衞は辛く起て外方へ出でぬ。――と看る間もなく、彼は再びこゝに入り來て、緣側の端に控へさせしは牧野兵庫なり。城州は瞥るより疾く、「や、其方は兵庫な！　予は山城ぢや。」「扨は御手前様、城州様？　先づは御機嫌の體……」「いや機嫌は好くないよ。其の好くないはお主も知らう、這奴等所以ぢや。お主が入魂と聞く三四郎めらがする所爲ぢや。」扨は此殿、喧嘩を買はるゝか、もとより喧嘩を賣りに來し我們、面白ろし其義とあらば、と再び迂濶の口を開かず、其邊じろりと睨め回す其瞳子に忽地映れるは、彼の三四郎が血塗泥なる姿なり、さしもの兵庫、呵呀と叫ひて其膝を寄せむとする時。「兵庫、お事は火急の用といふ。何事ぢや、其用？」兵庫、唾を嚥下みて、次で手を支へ、「恐れながら御政道義に就きまして……」「ふむ、政道の義？　ハハ政道に無私いは斯くいふ山城が豫ての自讃ぢや。紀伊國殿褒詞もあるか。」「いや左樣にもおざりませぬ。此處に居る者共が愁訴の趣意、其の訴狀につきて一應の愚考仕つりましたるに……反別一升の過米と申す。」……「それが如何した？」「昨年の飢饉に續きて今年の瘟疫、これらは手前申上ぐる迄もおざらぬ。箇樣に疲困れたる窮氓に重々の御徵發、恐れながら御仁政とも……」「廢いと言ふか？　それが氣附か？　ハハ兵庫、其方も紀伊殿家老、それ程の事心附かぬは近頃の無穿議ぢやぞ。こりや熟う聽けい、過米の徵發は江戸からの御下知ぢや、城代の山城はたゞ一途に江戸の御沙汰を相守るぢやぞ。仁政の不仁政の と意見があらば江戸へと申せ。」「如何にも御沙汰、江戸表へも申ませう。然ながら駿府五十五萬石、其土地につきての利害は御手前樣御手心の裏にござります、例令江戸表御下知とござりませうとも其の土地人民の難義難澁とござあること、御申達の趣意も聞えず、只一偏の御守り、是も近頃の御無穿議かと、憚りながら公儀御代官たる御役目の手前に對して、笑止の義……」言せも敢へず城州は、其血逆れる眼赫と瞪りて、「扨は我等を木偶と申すか！　今一言、木偶なら木偶！」「いや、木偶とは申ませぬ。但し道理の當る處……」「えゝい道理が當るか、刃鐵が當るか、今一言！陪臣輩が！　無禮！　無禮！」「陪臣とは仰らるゝも御三家の御一人、當將軍家には恐れながら御叔父に當らせらるゝ大納言家老、牧野兵庫！」「うゝ其の大納言……納言殿を汝は御叔父……御三家の一人と言ひをるか！　幕府御譜代たる予が目からは敵……」言ひ斷らざるに彌五兵衞は飛來りて、主の袂を摹く扯きたり。「枝葉の御事、無益しい御議論、然樣の瑣事に御隙取らるゝ……それよりも公儀御敵たるべき彼奴等が譬押人、……白狀さずば只今の拷問なされて。」「太息吻いたる城州は、兵庫を後眼にかけたる儘再應は語を交へず、其膝暴かに此方に振向けて、「やア三四郎！　汝、今訊うた强訴の後楯、疾う言ふまいか！」

（九）

城代が語氣を逆へて其意を推すれば、彼が屢〻訊ふ、我が愁訴の後援といふは、此座なる兵庫どの、續きては大納言樣！　それが遁れぬ關繫を有ち玉ふ、否眞正の張本！　とは實に意外の！　膽の潰るゝ！　思ひきやの窮極！

と三四郎は愕きたり。

抑〻是れ故意か、誤解か、若くは讒人の其間に在りて有らぬ誣告を巧計たるか？　故意とあらば詮なきも、誤想といひ、讒間とあらば、現犯の本人たる我口より此の證明發揮と立てゝ其の寃き御名を雪がで置くべきか。吁、さるにても其の誤解の原由、讒間の起因といふ、昨日の我が大谷にての振舞か。げにも邪推の眼をもて彼狀を看なば、然りとも見えむか、口惜しや爾うとも知らば最初より彼人(?)の教示に委して、到底死ぬ身を、江戸へ立ち越え、執政への駕訴、將軍家への御直訴も爲奉つらむを！　分別の足らで此の破目に陷る、あら無念や！　憤然として伸上らむとする頂邊に、「三四郎、强訴の後楯、白ふまいか！」「申します、申します、申ませいでか！　三四郎が强訴の後楯は斯く申す三四郎！　三四郎が三四郎に强訴をさせたのでござります、其外には誰一人、結厘も、臀押腰押、談合した人はござりませぬ。はい、發揮と此義申上げます。」城州が眼は此時、爛たる鏡の如し。「白はぬな！　汝、可、白ふな、白はずとも白はせておくか！　ソレ撻ツ！」彌五兵衞は且づ暫時と和めつ、「や、三四郎、お主心得が惡しいぞ。尋常ならば我々式、又は支配の與力衆、吟味とあるべきを、此事大事と思し召せばこそ御城代御自身御調べともある事ぢや。其方は此の一件、只の强訴と思ふであらうが、其の汝に囑賂を飼うて此の珍事挑發させた本人はな、内々深い巧謀がある。其の巧謀が公儀御耳へ聞えたで、萬一の兵粮の御用意としてあの過米も徵さるゝぢや。な、分解たか。されば其方、其の後援の本人、すなはち謀叛人、こゝにて明白に申立てなば恐れながら江戸上樣にも御滿足、隨ツて禍害の根も失くなれば、此の過米の御沙汰も息む。別しては其方、强訴の張本として磔刑にもなるべき處を、謀叛人訴への功によりて其罪御赦免あるのみならず、由格の御褒美も下さるゝぢや。さ、如何ぢや。其身、政府への御忠節者として、人にも譽られ、御褒美の榮耀に誇るが所好か、又は謀叛人同類として磔木に懸るが所存か今が分別の境目ぢやぞ。有體に白へ。……むゝ白ぬな。これ程に利害を分說ても？」「むゝ彌五兵衞措け、撻んで白ふか！　鞭て、鞭てッ！」「お、お撻ちなされませ。撻たとて意にも無い御言懸の白狀は三四郎口に出ませぬ。」「呀、言懸け？　えゝいそれッ！」と彌五兵衞も叫びぬ。獄卒は心得たりと彼を俯向に壓伏せて、一人は其の片枷なる足を扯り、白洲の上に匍匐はすれば、同時に桿棒は其背に下りぬ、劉々として風を斬る苛杖は容捨もなく其皮を破りて肉に及べば、臠片は寸斷れて、混々たる鮮血に交る肉の雨四邊に飛散り、被拷者は既に聲失く、たゞ其の肩頭より下腹にかけて盪つ大濤の如き苦息の裏に、寃枉を天に訴ふるに肯たる可怖しき唸呻を發すのみ。凄極。慘極。惡態の目も當られぬに、兵庫、何をかな此一時を救護くる工夫をと、悶ゆる目に發見したるは、此の白洲の定法ならぬといふ一事なり。

「待て。其の拷問暫く待て。やア城州に申す、此の御席に立合の御目付衆は御居やるか、御横目衆は？」城州より先に南無三との面せるは彌五兵衞なり、急所を衝かれて覺えず其邊虚呂虚呂するを兵庫得たりと其傍に躍り進みて、一根方氏、大事の罪人の拷問に御目付方の立合あるは御法の表ぢや。此の御席に然る衆も見えぬは何たる事？　其の仔細……や、御返詞ないは

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com